産経新聞
2011.1.14

オフィスタウンへ ニコタマが変わる

創造性高め合う「クリエイティブシティ」に

「ニコタマ」の愛称を持ち、首都圏でも人気のファッションタウンとして知られる二子玉川（東京都世田谷区）が大きく変わろうとしている。ビジネスインフラの整備で、新たにオフィスタウンとして進化することが期待されている。その仕掛け人に話を聞いた。

（谷内誠）

「二子玉川がクリエイティブシティに変わる」と話す東急電鉄の東浦さん

渋谷駅から東急田園都市線急行で11分。二子玉川駅に降り立つと、駅東口に立つ巨大なビル群が目に入ってくる。

沿線最大級、1033戸の高層マンションはほぼ完売。昨年5月から入居が進み、12月1日には最も駅寄り、I街区の「ライズ・オフィス」が営業を始め、街の顔がはっきりと現れてきた。

「二子玉川を、新たなビジネス提案ができる地にしたい」と話すのは再開発事業を担当する東急電鉄企画開発部統括部長の東浦亮典さん。

従来の二子玉川は、西口に昭和44年に日本初の郊外型ショッピングセンターとしてオープンした玉川高島屋を中心に〝山の手マダム〟が集まる街のイメージがあった。一方の東口は明治末期から玉川遊園（昭和60年に閉園）として親しまれたが、住宅地の間に空き地や田畑もまじり、開発が遅れていた。そこに平成19年、敷地面積約11㌶に及ぶ都内最大規模の再開発事業が着工された。「rise（ライズ）」の名称で商業、オフィス、住宅施設をI（a、b）、II（a、b）、IIIの計5街区に分けて事業が進む。

しかし、多摩川を渡れば川崎市に入る二子玉川には、ビジネス街のイメージは薄いが…。

「丸の内、大手町などスーツ姿が目立つ都心のビジネス街とは違う、働く人が互いに交流し、創造性を高め合う『クリエイティブシティ』の性格を持つ街を目指す」という。

ITを中心に、さまざまな起業家が集まって発展した米国シリコンバレーに代表される街のイメージか。

「二子玉川は沿線の渋谷、さらに地下鉄とつながる大手町、羽田空港や新幹線が停車する品川―とアクセスの優位性がある（別図）。新たなワークスタイル、ライフスタイルを提案し、街の発展を目的としたクリエイティブ・シティ・コンソーシアム（共同事業体）には、大手企業から地元町会まで50者が参加し、将来は100者ほどにまで広げたい」

ライズ・オフィスは駅を降り立ち、巨大な吹き抜け空間のあるガレリアに接する。東浦さんは「オフィス棟に入るアパレル企業が、ガレリアでファッションショーを開くこともできる。3月オープン予定のライズ・ショッピングセンターが消費の場なら、ライズ・オフィスは創造する場。それら人の交流が新たな街の価値を高めるだろう」と将来性に期待する。

東京東部、下町エリアでは大手私鉄の東武が東京スカイツリーを軸に再開発を進めるが、山の手代表の東急は、西から上に昇る街「ライズ」で勝負だ。

クリエイティブ・シティ・コンソーシアム副会長で東大名誉教授の松島克守さんの話　「大手町、丸の内と大きく違うのはそこに人が住んでいるということ。東急大井町線と多摩川にはさまれたエリアは富裕層も多く、住みたい街の人気度も高い。駅から、商業、オフィス、住宅と各施設の人を対象に街としての社会実験もできる。クリエーターやアーティスト、企業の企画、開発系の人たちが集まり、住めば街として磨かれ、より高感度な地になるだろう。こうした街は東京では二度と出てこないという希少性もある」

問い合わせは
東急お客様センター
☎03・3477・0109
FAX03・3477・6109
（月～金午前8時～午後8時、土日祝は午前9時半～午後5時半）

住まいる情報局